

# 日本語における女性標示語「女子～」

徐 微 潔

## 1. はじめに

ジェンダー (gender) は、生物学的性別 (sex) と区別される「社会的・文化的・歴史的につくられた性別」である。ことばとジェンダーに関する研究は、二つの流れに分かれ、一つは女性や男性を表現することばに焦点を当てた研究で、もう一つは、ことばづかいの性差にかかわる研究である。中村 (1995) では、前者を「ジェンダー表現研究」、後者を「言語使用とジェンダー研究」と名付け、前者をさらに二分している。そして、「ジェンダー表現研究」は、男というジェンダーはどのように表現されているのかという研究と、女というジェンダーはどのように表現されているのかという研究に分けられる。

ジェンダー表現研究の一環として、徐 (2012:37) では、従来「女性冠詞」と呼ばれてきたことばを「職業や身分などを表わす形態素の前に来て、当該の職業や身分を有している女性を表わす「女～」「女子～」「女性～」「女流～」「婦人～」などの呼称のことばである」と再定義し、「女性標示語」と命名している<sup>1</sup>。

「女子～」は「①おんなのこ。むすめ。によし。②おんな。婦人。婦女。女性。」(『精選版日本国語大辞典』) の意味であり、日本語における主要女性標示語の一つである。

女性標示語「女子」については「結合するのは、教育に関する語が多」(遠藤 1983) く、「女子」は生徒や学生に対して使われる場合が多いが、「女子アナ」「女子工具」など、職業人に「女子」がつけられるケースもある」(田中他 2006、2009、徐 2012b)、また「女子～」は会社員関連が減り、生徒・学生関連は常駐・増加の傾向がある」(田中他 2011) などの後項要素の特徴と使用の変化が指摘されている。そのほか、ごく少数ではあるが、「女子～」に潜むジェンダー・イデオロギー<sup>2</sup>に触れた研究 (田中他 2009、原田 2010) も見られる。

しかし、上記の研究は差別の観点からの研究がほとんどであり、言語学的な観点に欠けている。また、田中他 (2006、2009、2011) のように、1980年代半ばより定期的に行った新聞紙面調査で取ったデータをもとに、「女子～」などを分析している研究も見られるが、詳細な考察を加えておらず、2006年以降の使用状況も不明である。「女子～」の使用実態、接続制約及びその要因など十分に解明されているとは言い難い。

そこで本稿では、新聞のデータベースを用いて、ここ五年間 (2006年～2010年) の

新聞記事に現れている「女子～」の使用実態を観察する。ついで、なぜそのような使用実態になっているのかを社会言語学的手法で分析する。

## 2. 調査の概要

本稿は『朝日新聞』を調査対象とした。これは『朝日新聞』が発行部数が多く購読率が高い、かつ、記事を網羅的に検索できるためである。検索期間は2006年から2010年までの五年間としたが、膨大なデータ量を考慮して各年二ヶ月分（4月と10月<sup>3</sup>）を対象とする。なお、検索でヒットした用例のうち、本稿における「女性標示語」の定義と一致しない「女子ゴルフツアー」「女子オープン」「女子大学」「女子監督」「女子委員長」などの疑似用例<sup>4</sup>は除外した。

こうして得られたデータは、「女子生徒」「女子学生」「女子選手」「女子職員」「女子社員」など、使用例が実に豊富である。本稿では、これらを前項要素の「女子」が「女性」に置き換えられるかどうかによって二分した。「女性」に置き換えられるものをA類、「女性」に置き換えられないものをB類として、分析する<sup>5</sup>。

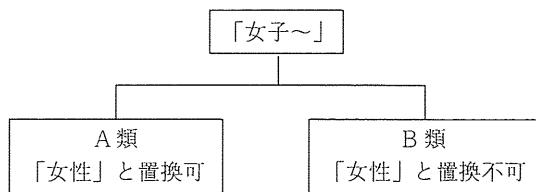


図1 「女子～」の分類

## 3. 結果と分析

本節では、調査結果に基づき、「女子～」の出現記事数、タイプ・トークン比（TTR）<sup>6</sup>を示し、「女子～」の使われ方を分析する。

### 3.1 「女子～」の出現記事数

2006年から2010年までの各年度の「女子～」の出現記事数とA類とB類の比率は表1のとおりである。

また、A類とB類の語例を見てみると、A類の後項要素は主にスポーツや職業に関することは、B類は教育に関することが分かった。そこで、A類をさらに「A-1」類と「A-2」類に分けて、A-1を「スポーツ関連」、A-2を「職業関連」、B類を「教育関連」と名付ける<sup>7</sup>。

表1「女子～」の出現記事数（出現頻度上位5語）<sup>8</sup>（ ）内はA類とB類の比率（%）

種類	2006年		2007年		2008年		2009年		2010年		
	語例／記事数		語例／記事数		語例／記事数		語例／記事数		語例／記事数		
A類	A-1	女子選手	10	女子選手	6	女子選手	10	女子選手	8	女子マネージャー	82
		女子砲丸投げ	4	女子ゴルファー	2	女子プロレスラー	3	女子ゴルファー	1	女子選手	18
		女子プロ	2	女子プロ選手	1	女子ボクサー	2	女子ボクサー	1	女子マラソン選手	2
		女子主将	2	女子プロレスラー	1	女子マネージャー	2	女子レスラー	1	女子プロレスラー	1
		女子コーチ	1			女子プロボクサー	1	女子プロ選手	1	女子野球選手	1
		その他	6	その他	0	その他	1	その他	5	その他	4
	計	25 (4.1%)		10 (1.8%)		19 (3.6%)		17 (3.4%)		108 (15.4%)	
	A-2	女子職員	2	女子アナ	7	女子職員	2	女子アナ	6	女子社員	2
		女子店員	2	女子職員	2	女子工員	1	女子職員	4	女子アナ	2
		女子社員	2	女子刑事	2	女子アナ	1	女子行員	3	女子職員	1
女子アナ		2	女子社員	1	女子読者	1	女子社員	1	女子従業員	1	
女子行員		1	女子従業員	1			女子従業員	1			
その他		2	その他	1	その他	0	その他	2	その他	0	
計	11 (1.8%)		14 (2.6%)		5 (0.9%)		17 (3.4%)		6 (0.9%)		
小計	36 (5.9%)		24 (4.4%)		24 (4.5%)		34 (6.8%)		114 (16.3%)		
B類	女子生徒	206	女子生徒	151	女子生徒	147	女子生徒	124	女子生徒	166	
	女子高生	97	女子高生	82	女子高生	77	女子高生	81	女子高生	80	
	女子高校生	68	女子高校生	72	女子中学生	57	女子学生	70	女子高校生	76	
	女子学生	53	女子学生	65	女子高校生	56	女子高校生	49	女子学生	73	
	女子中学生	52	女子大生	52	女子学生	52	女子大生	44	女子中学生	69	
	その他	100	その他	103	その他	115	その他	104	その他	125	
	小計	576 (94.1%)		525 (95.6%)		504 (95.5%)		472 (93.2%)		589 (83.7%)	
合計	612		549		528		506		703		

表1に示したように、「女子」のつく語が現れた記事数は五年間であまり大きく変化していない。種類別に見ると、B類「教育関連」は圧倒的に多く、全体の約9割以上を占めているが、A類「スポーツ・職業関連」は1割以下しか占めていない。

また、A-1類「スポーツ関連」の場合は、「女子選手」「女子ゴルファー」の出現頻度が高く、「選手」「ゴルファー」「ボクサー」「レスラー」などスポーツと関係のあることばの前によくつき、A-2類「職業関連」の場合は、「女子アナ」「女子職員」「女子社員」が頻繁に出現し、「アナ」「社員」「職員」「行員」など会社員を表すことばの前によくつく。

一方、B類「教育関連」の場合は、「中学生」「留学生」「短大生」「医学生」「園児」「学徒」など教育とかわかっていることばの前につき、その中でも「女子生徒」「女子高生」「女子高校生」が上位であった。

### 3.2「女子～」のトークン比と造語力

「女子」のつく語の豊富さと多様性を見るために、本稿では、A類とB類のトークン比（TTR）を算出し、表2に示した。

表2 「女子」のつく語のトークン比

トークン比		年度		2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	全体
		延べ語数	異なり語数	トークン比	延べ語数	異なり語数	トークン比	延べ語数	異なり語数
A類	A1	延べ語数	28	11	22	18	115	194	
		異なり語数	11	4	6	10	9	26	
		トークン比	0.393	0.364	0.273	0.556	0.078	0.134	
	A2	延べ語数	12	21	5	22	8	68	
		異なり語数	7	6	4	7	4	11	
		トークン比	0.583	0.286	0.800	0.318	0.500	0.162	
B類	延べ語数	890	757	775	649	840	3911		
	異なり語数	16	18	20	19	18	28		
	トークン比	0.018	0.024	0.026	0.029	0.021	0.007		
総延べ語数		930	789	802	689	963	4173		
総異なり語数		34	28	30	36	31	65		
総トークン比		0.037	0.036	0.037	0.052	0.032	0.016		

表2に示したように、A類「スポーツ・職業関連」の場合はB類「教育関連」よりトークン比の値が高いが、延べ語数も異なり語数も少なく、語の使用度数が低い。各年度のトークン比から分かるように、B類は語のバラエティに乏しく、28種前後の語が繰り返して使われている。また、総トークン比で見ると、全ての調査年が0.1以下で、特に全体の総トークン比が非常に低く、限られた語が反復して用いられていることが分かる。

次に、「女子～」がどれぐらい多くの語と結びつくかという造語力を種類別に見てみる。

表2の異なり語数で見れば、A類「スポーツ・職業関連」は37（A-1類26、A-2類11）、B類「教育関連」は28であり、B類よりA類のほうがいささか大きく見える。しかしながら、それは、B類は学生という身分に関する名称で、自由に造語するわけにはいかないのだから、当然の結果だと言えよう。一方、A類はスポーツを含め、職業全般を表すことばであるため、必ずしもA類の造語力が高いとは言えないようである。そして、A類のA-2「職業関連」においても「女子社員」「女子店員」「女子職員」など固定的に使われてきたものでも、今では「女性社員」「女性店員」「女性職員」のほうが出現記事数が多く、優勢を占めている。表3で示す。

表3 「女性～」の出現記事数

種類	2006年		2007年		2008年		2009年		2010年	
	語例	／記事数	語例	／記事数	語例	／記事数	語例	／記事数	語例	／記事数
A 1	女性選手	5	女性選手	1	女性選手	1	女性選手	1	女性マネージャー	0
	女性砲丸投げ	0	女性ゴルファー	0	女性プロレスラー	0	女性ゴルファー	0	女性選手	2
	女性プロ	0	女性プロ選手	0	女性ボクサー	1	女性ボクサー	0	女性マラソン選手	0
	女性主将	0	女性プロレスラー	0	女性マネージャー	1	女性レスラー	0	女性プロレスラー	0
	女性コーチ	2			女性プロボクサー	0	女性プロ選手	1	女性野球選手	0
	その他	0	その他	0	その他	0	その他	0	その他	0
	計	7 (4.5%)	1 (0.7%)	3 (4.5%)	2 (1.9%)	2 (1.5%)				
A 2	女性職員	64	女性アナ	0	女性職員	63	女性アナ	0	女性社員	20
	女性店員	26	女性職員	70	女性工員	0	女性職員	48	女性アナ	1
	女性社員	18	女性刑事	4	女性アナ	0	女性行員	4	女性職員	69
	女性アナ	2	女性社員	22	女性読者	0	女性社員	16	女性従業員	40
	女性行員	9	女性従業員	35			女性従業員	30		
	その他	30	その他	2	その他	0	その他	3	その他	0
	計	149 (95.5%)	133 (99.3%)	63 (95.5%)	101 (98.1%)	130 (98.5%)				
小計	156	134	66	103	132					

表3は付表1の語例の前項要素「女子」を「女性」に入れ替えて調査した後、表2の「女子～」の調査結果との比較がしやすいように並べたものである。「女性プロレスラー」「女性主将」などは調査期間内では用例は見つからなかったが、ことばとしては存在する。例1と例2で示す。

例1 竹中氏の途中退場により、女性プロレスラーが繰り上げ当選になる。竹中氏、そして改革を支持した有権者は、自分の1票の行方に戸惑うのではないか<sup>10</sup>。  
(朝刊 2006 / 9 / 29)

例2 選手団の主将を務める岡崎選手は4大会連続の出場。女性主将は94年リレハンメル大会の橋本聖子選手以来2人目。(朝刊 2006 / 1 / 16)

さらに、「女子～」の造語力をより客観的に見るため、2006年～2010年(4月と10月)の新聞記事に出た女性標示語「女性～」を調べた。女性標示語の定義と一致しない「女性同士」「女性相手」「女性史研究家」などの用例を除外し、集計したデータに基づき、「女性～」のトークン比を算出した(表4参照)。

表4 「女性」のつく語のトークン比

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	全体
延べ語数	1131	1320	933	1055	1191	5630
異なり語数	271	236	236	219	234	630
トークン比	0.240	0.179	0.253	0.208	0.197	0.112

表4から分かるように、「女子～」より「女性～」のほうが延べ語数も異なり語数も多く、特に異なり語数があるかに多い。つまり、「女性～」の後項要素が豊富であり、たくさんの語と結合できるのである。

### 3.3 新聞記事における「女子～」の使われ方

3.1節の表1に挙げた語例から分かるように、「女子～」は「生徒」「高生」「高校生」「学生」「選手」などB類「教育関連」やA-1「スポーツ関連」などの分野の職業や身分を表す語の前によくつく。例3と例4を見られたい。

例3 中津川市の廃屋で、中学2年の女子生徒が殺された。逮捕された容疑者が高校1年の少年だったことに、さらに驚いた。(朝刊 2006 / 4 / 29)

例4 「恵まれない練習環境にいる女子選手たちが、野球に専念できる場をつくろう」。女子プロ野球リーグは、そんな思いが発端となって誕生した。(朝刊 2010 / 4 / 23)

下記の例5と例6が示すように、「女子～」は「職員」「アナ」「社員」など「職業関連」のことはの前にもつくが、語例が少なく、出現記事数も多くない。

例5 同ホテルに勤務する20代の女子社員は「お客様からも心配されたこともあったが、混乱が収まって一安心した」と話した。(朝刊 2006 / 4 / 2)

例6 集会では生徒からの質問の時間も設けられた<sup>▼</sup>。「結婚相手は女子アナですか」「契約金はいくら？」と遠慮ない問いかけに、2人は苦笑。(朝刊 2010 / 10 / 30)

女性標示語は性別に関して非対称的で、「女性標示語には<人=男>のイデオロギーがある」(佐竹 2001)としばしば批判されている。「女子～」の使用には、例7～例9のように男性は無標、女性は有標という傾向と、<人=男>というイデオロギーが現れている。

例7 上山署は19日、山市金生東2丁目、会社員A容疑者(64)を有価証券偽造・同行使と詐欺の疑いで逮捕した。(中略)、山市南町のスーパー宝くじ売り場で女子店員に当たり券として提示し、2等の当選金1万円をだまし取った疑い。(朝刊 2006 / 10 / 20)

例8 調べでは、経営者の内田心さん(33)と女子従業員1人が部屋におり、鍵のかかっていない玄関から目出し帽をかぶった男2人が催涙スプレーを噴射しながら侵入、「金を出せ」と脅し、金属バットで内田さんを殴り、財布を奪ったという。(夕刊 2006 / 10 / 23)

例9 プロ野球ロッテの西岡剛 (23) との交際が一部で報じられた女子プロゴルファー古閑美保 (25) が11日、スタジオアリス女子オープンに出場。(朝刊 2008 / 4 / 12)

しかし、「女子」を付加することは必ずしも先行研究が指摘したように女性を差別するとは限らない。例10と例11のように「女子～」は性別を明示する必要のあるときに多用されているし、例12～例14が示すように男性標示語がついた「平衡表現<sup>11)</sup>」も多く現れている。つまり、新聞の実例にパラレル・トリートメント(両性の対称な扱い)を取っている例も少なくない。

例10 10年ぶりに変更された女子行員の制服は「信頼感」をテーマにデザインしたといい、新入行員代表の今田悠さん(23)は「地域の経済・社会の安定が何より大切で、それをもたらすのは人と人との信頼関係」と述べた。(朝刊 2009 / 4 / 2)

例11 女子社員に「結婚、考えている?」と聞けば、セクハラと受け取られかねない。だから自力で相手を探す作業が必要になった。(朝刊 2009 / 10 / 14)

例12 ある女子生徒は「国語では、自分の考えをまとめて書く問題が、普段のテストにはなく大変だった」。男子生徒も「国語の記述問題が難しかった。あまり心配しないで受けたが、塾の勉強というより、学校の勉強をしていれば解ける感じだった」と振り返った(朝刊 2007 / 4 / 25)

例13 式では女子学生にキャップ、男子学生にはコサージュが着けられた。ナイチンゲールが暗い病院でろうそくをともして看護をしたことにちなみ、それぞれがろうそくの明かりを手にして奉仕の心を誓った。(朝刊 2008 / 10 / 3)

例14 市によると、男性職員は昨年5月28日、別の部の事務室内で、電算事務処理について40歳代の女子職員と机のそばで話をしている際、女子職員の下半身を触ったという。(朝刊 2010 / 10 / 7)

例10と例11は性別情報が必要な場合で、例10の冒頭部分は「女子行員」ということばを使ってジェンダー情報を明示するが、それ以降の文脈ではジェンダー・フリーの「行員」が使われている。また、例12～例14はそれぞれ「女子生徒」「女子学生」「女子職員」の平衡表現が使用されている。例14の「男性職員」と「女子職員」は完全には対応していないが、均衡的な表現と見なす。

#### 4. 考察

3節の分析で「女子～」の使用実態が明らかになった。本節では、なぜ「女子～」がそのような使用実態をなしているのかを検討したい。

「女子～」を含め、女性標示語が使われるのは、以下の条件が考えられよう。

- ①男性のものとされる世界に女性が進出してきた場合。
- ②その力が男性に比べて明らかに弱く、男性とは一線を画した存在として扱いたいという思いが明確な場合。

「スポーツ関連」のA-1類は①と②の場合に相当すると言える。「職業関連」のA-2類と「教育関連」のB類は①の場合に相当すると思われる。

スポーツはもともと男子を中心とした貴族社会の文化として発生したものである。女性がスポーツと関わり出したのは、歴史的にはごく最近になってからであり、実際、女性がスポーツを本格的に行うようになったと認められるのは、20世紀に入ってからのことである（岡野 2010：88）。オリンピックにおいて、女性の参加が正式に許されたのは1904年のセントルイス大会でのアーチェリーであり、次の1908年のロンドン大会でも三種目しかなく、参加した女性の割合は、全体の2%前後でしかなかった。日本では、1926年4月1日に日本初の女性スポーツ組織、日本女子スポーツ連盟（JWSF）が設立され、1954年8月5日に日本女子体育連盟が結成された。

このような状況の中で、女性の選手はそれまでにあった男性の世界とは別物、選手の亜流という意味で「女子選手」などと名付けられたのではないかと考えられる。ポール・ワイス（1985：232-233）では、女性を不完全な男性として観ること、女性を半端な男として取り扱うことは、スポーツの世界ではしばしば見受けられることであったと指摘されている。

教育界では、終戦までは、共学の主張は時折行われていたが、共学は極一部の特種学校で実施されていたのみで、一般的には共学は認められておらず、また実施されていなかった。戦後の1947年3月31日に『教育基本法』が公布され、学校における男女共学について規定し、これにより、男女別学の多くの学校が共学に移行した。男女共学の普及に伴い、女子が男子の圧倒的に多かった世界に入ってきた。そういう女子を表現するため性別を明示する必要性が生じてくる。

職業関連では、現在になっても多くの職業は依然として、男性に占められており、専門的な職業においてこの傾向が著しい。このことは、「王」「医師」「警官」「棋士」「職員」「社員」は男性を意味し、女性の場合には「女王」「女医」「女性警官」「女流棋士」「女子職員」「女子社員」など女性標示語を付加した用語上の習慣もその実態を示している。

では、なぜ「女性～」「女～」「婦人～」「女流～」ではなく、「女子～」であったのだろうか。それは、「女子」の持っている意味合いとかかわっているからだと思われる。

ここでは、日常の言語生活でよく使われている辞書の記述に基づき、「女子～」の使用実態を分析する。



表5 使用辞書一覧

出版年	辞書名	編者	出版社	略称
2006	精選版日本国語大辞典	小学館国語辞典編集部	小学館	精選
1988	学研国語大辞典 第二版	金田一春彦・池田弥三郎	学習研究社	学研
1995	新潮国語辞典一現代語・古語 第二版	山田俊雄・築島裕他	新潮社	新潮
1989	日本語大辞典 講談社カラー版	梅棹忠夫・金田一春彦他	講談社	講談
2008	広辞苑 第六版	新村出	岩波書店	広辞
1995	大辞林 第二版	松村明	三省堂	大辞

表6 辞書における「女子」の記述

辞書	記述
精選	①おんなのこ。むすめ。によし。②おんな。婦人。婦女。女性。 p.662
学研	①女の子ども。むすめ。⑩子女。女兒。②おんな。女性。⑨婦人。⑧男子 p.957
新潮	①女の子。娘。によし。②女。婦人。 p.1064
講談	〔対義〕男子。①おんな。女性。婦人。woman ②むすめ。女の子。girl p.973
広辞	①おんなのこ。娘。②おんな。女性。婦人。↔男子 p.1411
大辞	①おんなの子。むすめ。②おんな。女性。婦人。↔男子 p.1266

表6の記述から、「女子」は、①おんなのこ。むすめ。と、②おんな。婦人。女性、との2通りの意味があることが分かる。

「女子」は「①おんなのこ。むすめ。」という未成年者を意味するため、教育を受ける年齢層が低い段階で、よく使用されることが予想できる。つまり、「女の子」を表す語は他にないので、この語の作る複合語は学校・教育に関するものが（遠藤 1983：26）多い。今回の調査で「教育関連」のB類が「女子～」の9割以上を占めているのもこれが一因であろう。もちろん、「女学生」や「女生徒」のことももあるが、「女学校の生徒」という意味合いが強い。

また、「女子選手」「女子ボクサー」「女子プロゴルファー」などスポーツ関連のことばにおける「女子」は英語「woman」の訳語だと思われる。「スポーツ関連」は比較的年齢層が低く、若さ、いきいきしているという意味合いが読み取れるため、「woman」を日本語に翻訳する際、「婦人」「女流」ではなく、「女子」に訳されているのであろう。中国語においても、スポーツ種目やスポーツをやっている女性に“<sup>3</sup>女<sup>2</sup>子”が使われている。例えば、例15～例17で示されるように“女子鉛球（女子砲丸投げ）”、“女子网球（女子テニス）”、“女子花滑（女子フィギュア）”、“女子选手（女子選手）”、“女子运动员（女子アスリート）”などである。

例15 1989年9月、黄志红以20.73的成绩，夺得了世界杯田径赛女子铅球金牌。

（1989年9月、黄志红氏は20.73点で、IAAF陸上ワールドカップ女子砲丸投げの金メダルを獲得した。）

例16 而在2004年雅典奥运会上，女子选手还不能参加拳击比赛。

(しかし、2004年のアテネオリンピックでは、ボクシング競技の女子選手の参加がまだ認められていない。)

例 17 新中国成立以来我国体育健儿共获得了 1000 多个世界冠军。其中女子运动员获得的数量占了一半以上，为国家争得了巨大的荣誉。

(新中国成立以来、わが国のアスリートたちは 1000 以上の金メダルを獲得、その内半数以上は女子アスリートが獲得し、国にとって大きな荣誉となった。)

そして、A-1 類はスポーツを表す固有の用法であるため、スポーツ選手などが新聞に登場する場合には、必然的にスポーツ名に「女子～」がしばしば用いられることになるのである。

「アラサー女子」「肉食女子」「スマホ女子」「生姜女子会」などの用例から分かるとおり、「女子」は「①おんなのこ」のほかに「②おんな。婦人。女性」の意味もする。そのため、A-2 類「職業関連」のように成人女性にも使われている。しかし、今回の調査では A-2 類は「女子～」の約 1.9%しか占めておらず、田中他 (2011) でも、「会社員関連が減る」と指摘している (表 7 参照)。

表 7 A-2 類「職業関連」の推移 (三紙合計、半月分、延べ語数)

1985 年		1991 年		1996 年		2001 年		2006 年	
語例/延べ語数		語例/延べ語数		語例/延べ語数		語例/延べ語数		語例/延べ語数	
女子社員	3	女子職員	4	女子社員	2	女子アナ	3	女子教員	2
女子職員	3	女子社員	2			女子工員	1	女子コーチ	1
女子アナウンサー	2	女子行員	3						
女子行員	1	女子労働者	3						
女子従業員	1	女子従業員	1						
女子工員	1	女子会社員	1						
女子店員	1								
女子公務員	1								
女子会社員	1								
女子パートタイマー	1								
女子書記局員	1								
小計	16		14		2		4		3

(田中他 (2011 : 214-215) のデータをもとに作成)

では、「職業関連」の占める割合が低く、減少傾向を見せるのはなぜだろう。

Nakamura (1990) では、女性の一般呼称としての「女」「女子」「女性」「婦人」の差異を分析している。Nakamura は「女子」は「女」のようなネガティブな性的意味合いはないが、ポジティブなことばでもない」と指摘し、以下のように述べている。

The emphasis in zyosi on “childishness” implies negative meanings of clumsiness, immaturity, irresponsibility, or incapability. Thus, only superiors

or associates would use *zyosi* to an adult woman. Therefore, *zyosi* co-occurs only with socially lower vocational terms such as \_\_\_-*syain* 'employee,' \_\_\_-*zyuugyoo*in 'clerk', \_\_\_-*paato* 'part-time worker,' \_\_\_-*roodoosya* 'worker.' (p.156) (「女子」の含意する「Childishness」は、「不器用」「未熟」「無責任」或いは「無能力」などネガティブな意味合いをほめかしている。したがって、上司や同僚しかこの言葉を成人女性に使わない。つまり、「女子」は「社員」「従業員」「パート」「労働者」など相対的に社会的地位の低い職業にしか使われないのである<sup>12)</sup>。

「女子」が Nakamura (1990) の指摘する「不器用」「無責任」「無能力」の意味合いを含意するかどうかは再考の余地があるが、「社員」「従業員」「パート」などの職業に使われるのは否めない。「女子」は「首相」「議員」「大臣」「教授」など相対的に社会的地位の高い職業に使われず、「社員」「行員」「店員」「従業員」など相対的に社会的地位の低い職業の使用例がよく見られるのは、やはり「女子」の「低年齢」「若さ」が強いきいているためであろう。

A-2 類「職業関連」の異なり語数が少なく、全体の割合が低く、「女子職員」「女子社員」などが「女性職員」「女性社員」で表されるようになってきているのも「女子」の「女の子供」の語義と深くかかわっていると考えられる。

では、男性には普通無標の職業名で表すのに、「平衡表現」のような両性の対称な扱いを取っている例が少なくないのはまたなぜだろうか。それは社会的要因に関係すると思われる。

1960年代以降欧米を中心に起きたフェミニズム運動<sup>13)</sup>が1970年代日本に波及し、1980年代から日本語の差別表現に関する包括的な研究が行われてきた。女性標示語は差別的だと指摘され、これに対する改革、改善が要求されていた。例えば、上野・メディアの中の差別を考える会(1996)では、ジェンダー的公正報道の五原則(性別情報不問、ジェンダー的公正、(両性の)対称な取り扱い、包括的な表現、脱・固定概念)を提案している。新聞界では、記者用のハンドブックや用字用語集が性差別的表現を批判するフェミニズム運動の高まりを受けて、その主張を一部取り入れて改定されていった。そして、新聞の送り手側と受け手側がジェンダーへの関心が高まり、女性が新聞業界に参入することにより、新聞業界の組織におけるジェンダー的構造の変化を引き起こした。

つまり、平衡表現の例が少なくないのは、徐(2011)と徐(2012a)で指摘しているように、「フェミニズム運動の影響」、「メディア側のガイドラインの公布」と「新聞の送り手側と受け手側に起きた変化」との三要因が考えられよう<sup>14)</sup>。

## 5. まとめと課題

本稿は、『朝日新聞』のデータベースを用いて、「女子～」の使用実態とそのような使用実態をなしている要因について分析した。分析の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 「女子」は「B類 教育関連」、「A-1 スポーツ関連」のこたばの前によくつくが、「A-2 職業関連」のこたばの前にも現れる。B類とA類の比率はおよそ9:1である。
- (2) 出現頻度から見ると、「B類 教育関連」>「A-1 スポーツ関連」>「A-2 職業関連」の順になっている。また、「女性」と比較して言えば「女子～」の造語力はそう高くなく、語のバラエティにも乏しい。
- (3) 現代になっても「女子～」の使用には男性は無標、女性は有標という傾向と、<人=男>というイデオロギーが現れている。しかし、「女子」を付加することは必ずしも先行研究が指摘したように女性を差別するとは限らない。平衡表現のような両性の対称な扱いを取っている例も少なくない。
- (4) 「女子～」が(1)～(3)のような使用実態をなしているのは、「女子の語義」のような言語学的要因と「フェミニズム運動の影響」、「メディア側のガイドラインの公布」と「新聞の送り手側と受け手側に起きた変化」のような社会的要因が考えられる。

また、前項要素としての「女子～」が「女性～」に置き換えられるかどうか、置き換えられた後どういう違いが生じるのかなどに関するテストやアンケート調査を行う必要もあると思うが、今後の課題としたい。

#### 注

1. 田中(1984:195)では、「女性冠詞」を「女性を“男性=人間”から区別するための印付としての“女〇〇”、“女子〇〇”、“女性〇〇”、“女流〇〇”といった語法を、かりに「女性冠詞」と呼んでおこう」と定義し、命名している。しかし、「冠詞」という用語は言語学において定着している別の意味を持っていて、日本語はそもそも冠詞のない言語であり、田中の定義には人を表す「女子生徒」「女性店員」などと性質の違った「女警察隊」「女子挺身隊」「女子グループ」「女性人気アイドルグループ」なども研究対象として扱っている問題点がある。
2. ジェンダー・イデオロギーとは、個々の集団において「語られること」によって歴史的に作り上げられてきたジェンダーに関する「常識・知識」となっているイメージ・カテゴリー規範を指す(中村2002:27)。詳しくは、中村(2002)を参照されたい。
3. 田中他(2011)は、調査年の10月のデータを取っているが、本稿は先行研究と比較する可能性を考慮し、同じく10月にしたうえ、半年ごとという目安で、調査期間を4月と10月にした。
4. これらは、一見定義に合っているようであるが、疑似用例のため、対象外とする。例えば、下記(1)の「女子監督」は「日本女子サッカーなでしこジャパンの監督」(佐々木則夫氏)の意味で、(2)の「女子委員長」は「日本サッカー協会の女子サッカーの委員長」を意味しているため、二例とも疑似用例である。
  - (1) 日本女子サッカー界は、9月の17歳以下W杯で準優勝、A代表の佐々木監督が女子監督の世界最優秀賞候補にノミネートと、来年の女子W杯(ドイツ)に向けてレベルアップを示す話題が続く。(夕刊 2010/10/29)
  - (2) 同協会の上田栄治女子委員長は力説する。「子どもを産んでも、力があれば代表でプレーできるというのは少女たちにとっていい目標になる」。(朝刊 2007/10/20)
5. B類の場合では、「女性大学院生」「女性大学生」「女性留学生」などのこたばもあるが、極少数のため、

本稿では、B類を「女性」に置き換えられないものとして取り扱う。

- (3) 同法人理事長の北浜菜子(ひでこ)・大阪大教授(理学博士)は「理工系の女性教員は増えておらず、身近にロールモデルが少ない」と指摘。1泊2日の日程で、女子高生と女性大学院生らとの交流の場も設ける予定でいる。(朝刊 2006/10/30)
- (4) 現在の支援の対象は、日本から留学する女性に加え、日本の大学院に在籍する外国の女性留学生、視覚障害者へと広がり、毎年約10人が1人あたり200万～300万円の奨学金を受けている。(夕刊 2010/10/12)
6. タイプ・トークン比 (TTR) は、延べ語数に対する異なり語数の比率 (Type-Token Ratio) で、トークン比とも呼ばれ、ある内容を表現する際に使われた語彙を対象にするものである。本稿では、言語形式に共通性のある語彙を対象にするため、TTRの本質から多少外れた使い方ではあるが、語の豊富さと多様性を分析するのに有効だと考える。
7. 調査期間内、「女子軍属」「女子挺身隊員」「女子孤児」の語例が4件ヒットしたが、「女子孤児」以外はほぼ死語になっているため、本稿は、分析の便宜上、これらを考察対象から除外した。なお、A-2「職業関連」は田中他(2011)の「会社員関連」に相当する。
  - (5) 沖縄での集団自決のことを聞いていて私のことを思い出しました。  
44年9月、中国・山西省陽泉という町に駐留していた部隊の女子軍属に採用されました。(朝刊 2007/10/22)
8. B類の中、出現記事数50以上の語例を数えると、2006年～2010年までそれぞれ5語、6語、5語、3語と5語で、年間平均約5語である。そこで、A類とB類の出現頻度上位5語をリストアップし、表2にまとめた。その他の語例は、付表1に示す。
9. 2010年「女子マネージャー」が82件に急増したのは、同年岩崎夏海さんの『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』という本がベストセラーになっていることと密接にかかわっていると思われる。
10. 本稿で挙げる日本語の例文は全て調査期間内の『朝日新聞』の実例で、便宜上『朝日新聞』の四字を省略し、朝夕刊と日付のみを記すことにする。中国語の例文は北京大学中国語言研究中心CCLコーパスからの実例である。なお、用例の日本語訳と下線は筆者によるものである。
11. 田中・諸橋(1996:54)では、同じような表現を「平行表現」と名付けているが、はっきりした定義がない。また、会話分析では「平行表現」とはパラレリズム(parallelism)のことで、「表現やフレーズの繰り返しや韻を踏む音節、文章のつながりを指し、1人の発話内でも生じれば、2人以上のやりとりで相手の発話形態を自分の発話に取り込む形で生じることもある(井出2008:183)」。例えば、店員:「no milk this morning ↑」客:「no milk this morning ↓. I'll pass on it for right now.」のような発話形態である。田中・諸橋(1996)の定義の曖昧さと会話分析における定義との混乱を避けるため、本稿では、ジェンダー研究において従来「平行表現」と呼ばれてきたことばを「ジェンダーに関する情報が不可欠な場合、「女優」と「男優」、「女子選手」と「男子選手」、「女性作家」と「男性作家」などのような均衡的な表現のことであり」と再定義し、「平衡表現」と命名する。
12. 日本語訳は筆者によるものである。
13. フェミニズムは女性の差別を根拠として、政治的・経済的・社会的、またはその他あらゆる形態の男性との差別や不平等に対し、その過程や実態を分析しその撤廃を求めて異議申し立てを行うすぐれた実践的な思想である(諸橋1996:76)。
14. 詳しくは、徐(2011)と徐(2012a)を参照されたい。

#### 【参考文献】

- 井谷恵子・原淳子他(2001)『目でみる女性スポーツ白書』大修館書店
- 井出里咲子(2008)『第9章スモールトーク』唐須教光『開放系言語学への招待—文化・認知・コミュニケーション』pp.171-192 慶応義塾大学出版会
- 伊藤公雄(1999)『スポーツとジェンダー』井上俊・亀山佳明『スポーツ文化を学ぶ人のために』pp.114-131 世界思想社
- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会(1996)『きっと変えられる性差別語—私たちのガイドライン—』三省堂

- 遠藤織枝 (1983) 「女性を表すことば (2) —明治 20 年代を中心に—」『ことば』(4) pp.1-27
- 岡野進 (2010) 『概説スポーツ—スポーツ理論を学び、考える—』創文企画
- 河原和枝 (1999) 「スポーツ・ヒロイン—女性近代スポーツ 100 年」井上俊・龜山佳明『スポーツ文化を学ぶ人のために』 pp.132-149 世界思想社
- 佐竹久仁子 (2001) 「国語辞書と性差別イデオロギー」『ことば』(22) pp.43-54
- 鈴木英一 (1978) 『資料教育基本法 30 年』学陽書房
- 徐微潔 (2011) 「戦後新聞紙面における「男性標示語」の推移」『筑波応用言語学』(18) pp.139-151
- 徐微潔 (2012am) 「新聞記事からみた女性標示語「女流～」の現在」『ことば』(33) pp.50-68
- 田中和子・諸橋泰樹 (1996) 「新聞は女性をどう表現しているか」『ジェンダーから見た新聞のうらとおもて「新聞女性学入門」』 pp.38-80 現代書館
- 田中和子他 (2006) 「新聞において女性はどうのように表現されているか—「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第四回調査を中心に—」『国学院法学』43 (4) pp.69-162
- 田中和子他 (2009) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在—「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査を中心に—」『国学院法学』46 (4) pp.55-134
- 田中和子他 (2011) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー・表現の現在 (その 3) —「延べ語数」と「異なり語数」の経年分析および「言語計画」の観点から—」『国学院法学』48 (4) pp.127-227
- 中村桃子 (1995) 『ことばとフェミニズム』勁草書房
- 中村桃子 (2002) 「言語とジェンダー研究」の理論」『言語』31 (2) pp.24-31
- 原田邦博 (2010) 「現代マスコミのジェンダー意識」『日本語とジェンダー』(10) 日本語ジェンダー学会  
[http://www.gender.jp/journal/no10/09\\_harada.html](http://www.gender.jp/journal/no10/09_harada.html)
- ポール・ワイス, 片岡暁夫訳 (1985) 『スポーツとはなにか』不味堂出版
- 諸橋泰樹 (1996) 「フェミニズムからの言語研究書 10 冊」『月刊言語』(10) pp.76-79
- 山本侑乃 (2006) 「「女性」を表すことばの変遷」『東京女子大学言語文化研究』(15) pp.128-133
- れいのるず・秋葉かつえ (1998) 「日本語の性差別」井出祥子監修『ことば』に見る女性』 pp.213-228 東京女性財団
- 林玉恵 (2009) 「女性の一般呼称を表す日中同形語の意味分析—「女子」「女性」「婦女」「婦人」を中心に—」『日本語研究センター報告』(16) pp.73-94
- 徐微潔 (2012b) 日語中“女性標示語”使用現状考察——以『朝日新聞』の報道为例『日語学习与研究』(1) pp.37-43
- Momoko Nakamura(1990) 「Woman' s Sexuality in Japanese Female Terms 」『Aspects of Japanese Women' s Language 』 pp.147-163 くろしお出版

#### 【資料】

1. 朝日新聞 (聞蔵Ⅱビジュアル)
2. 北京大学中国言語研究センター CCL コーパス  
[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp?dir=xiandai](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)

付表1 「女子～」の記事数と延べ語数（記事数／延べ語数）

種類	語例	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	計	
A類 スポーツ・職業関連	A1 スポーツ関連	女子マネージャー	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	82 / 83	82 / 83
		女子選手	10 / 10	6 / 7	10 / 12	8 / 8	18 / 23	52 / 60
		女子プロレスラー	0 / 0	1 / 1	3 / 3	1 / 1	1 / 1	6 / 6
		女子ゴルファー	0 / 0	2 / 2	0 / 0	1 / 2	1 / 1	4 / 5
		女子主将	2 / 2	0 / 0	0 / 0	1 / 1	1 / 1	4 / 4
		女子砲丸投げ	4 / 4	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	4 / 4
		女子プロボクサー	0 / 0	0 / 0	1 / 2	1 / 1	0 / 0	2 / 3
		女子ボクサー	0 / 0	0 / 0	2 / 2	1 / 1	0 / 0	3 / 3
		女子プロ	2 / 3	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	2 / 3
		女子マラソン選手	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	2 / 2	2 / 2
		女子マネージャー	0 / 0	0 / 0	2 / 2	0 / 0	0 / 0	2 / 2
		女子プロ選手	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1	0 / 0	2 / 2
		女子最長身選手	1 / 2	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 2
		女子野球選手	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 2	1 / 2
		女子ハンマー投げ	1 / 2	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 2
		女子円盤投げ	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子水泳選手	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子レスラー	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
		女子ボクシング選手	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
		女子プロゴルファー	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子フィギュアスケート選手	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	1 / 1
		女子スプリント	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子スケート	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子コーチ	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子プロボウラー	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	1 / 1
		女子キックボクサー	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
		計		25 / 28	10 / 11	19 / 22	17 / 18	108 / 115
A2 職業関連	職業関連	女子アナ	2 / 2	7 / 13	1 / 1	6 / 9	2 / 2	18 / 27
		女子職員	2 / 3	2 / 3	2 / 2	4 / 4	1 / 3	11 / 15
		女子社員	2 / 2	1 / 1	0 / 0	1 / 1	2 / 2	6 / 6
		女子行員	1 / 1	0 / 0	1 / 1	3 / 5	0 / 0	5 / 7
		女子従業員	1 / 1	1 / 1	0 / 0	1 / 1	1 / 1	4 / 4
		女子刑事	0 / 0	2 / 2	0 / 0	0 / 0	0 / 0	2 / 2
		女子店員	2 / 2	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	2 / 2
		女子アナウンサー	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1	0 / 0	2 / 2
		女子労働者	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
		女子工員	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
		女子読者	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	1 / 1
計		11 / 12	14 / 21	5 / 5	17 / 22	6 / 8	53 / 68	
小計		36 / 40	24 / 32	24 / 27	34 / 40	114 / 123	232 / 262	

B 類 教育 関連	女子生徒	206 / 373	151 / 240	147 / 295	124 / 194	166 / 276	794 / 1378
	女子高生	97 / 145	82 / 111	77 / 99	81 / 116	80 / 115	417 / 586
	女子高校生	68 / 93	72 / 90	56 / 76	49 / 71	76 / 115	321 / 445
	女子学生	53 / 84	65 / 96	52 / 77	70 / 91	73 / 99	313 / 447
	女子中学生	52 / 72	52 / 74	57 / 88	42 / 56	69 / 93	272 / 383
	女子大生	41 / 54	52 / 78	31 / 37	44 / 49	47 / 58	215 / 276
	女子児童	30 / 37	15 / 23	28 / 39	25 / 31	27 / 27	125 / 157
	女子大学生	11 / 13	13 / 18	22 / 23	13 / 14	23 / 28	82 / 96
	女子部員	7 / 7	8 / 10	12 / 14	4 / 6	6 / 6	37 / 43
	女子中高生	4 / 5	4 / 5	5 / 6	5 / 5	8 / 8	26 / 29
	女子短大生	1 / 1	2 / 3	1 / 2	3 / 3	3 / 3	10 / 12
	女子小学生	2 / 2	1 / 1	5 / 6	0 / 0	1 / 1	9 / 10
	女子大学院生	1 / 1	1 / 1	1 / 2	2 / 2	3 / 3	8 / 9
	女子専門学校生	1 / 1	3 / 3	1 / 1	2 / 2	1 / 1	8 / 8
	女子留学生	0 / 0	0 / 0	2 / 2	2 / 3	3 / 3	7 / 8
	女子中生	0 / 0	1 / 1	2 / 2	2 / 2	0 / 0	5 / 5
	女子小中学生	0 / 0	1 / 1	2 / 2	0 / 0	1 / 1	4 / 4
	女子医学生	1 / 1	0 / 0	1 / 2	0 / 0	0 / 0	2 / 3
	女子入所者	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 2	1 / 2
	女子卒業生	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
	女子専門学生	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
	女子中学1年生	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
	女子園児	1 / 1	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1
	女子医大生	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1
	女子学徒	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	1 / 1
女子小中生	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	1 / 1	
女子合格者	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1	
女子部長	0 / 0	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	1 / 1	
女子1年生	0 / 0	0 / 0	1 / 1	0 / 0	0 / 0	1 / 1	
小計	576 / 890	525 / 757	504 / 775	472 / 649	589 / 840	2666 / 3911	
合計	612 / 930	549 / 789	528 / 802	506 / 689	703 / 963	2898 / 4173	

表注：総延べ語数を降順に並べている。

【付記】

本稿は、2012年日本語教育国際研究大会（ICJLE2012）での発表内容に加筆修正したものである。本研究は平成24年度中国浙江省教育庁科研課題（課題番号Y201225041）《日语“性別标示语”の社会言語学研究》（「日本語における「性標示語」の社会言語学的研究」）（研究代表者徐微潔）の助成を受けた。

（じょ びけつ 筑波大学大学院博士課程 人文社会科学研究科 応用言語学 浙江師範大学外国語学院教師（中国））